World's Famous Classics

41

世界文学全集

Ф.М. Достоевский

ПРЕСТУПЛЕНИЕ И НАКАЗАНИЕ

ドストエフスキイ／北垣信行訳

罪と罰

世界文学全集——41

ドストエフスキイ

1974年9月18日第1刷発行
1981年10月15日第2刷発行
定価　1200円
訳者　北垣信行

発行者　三木　章

発行所　株式会社講談社　東京都文京区音羽2-12-21

郵便番号 112

電話　東京 03(945)1111(大代表)

振替　東京 8－3930

製版所　まゆら印刷株式会社

印刷所　東洋印刷株式会社

製本所　株式会社国宝社

© KODANSHA 1974 Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。
0397-410419-2253 (1)　(翻)

目次

第一編……5
第二編……100
第三編……221
第四編……319
第五編……414
第六編……505
エピローグ……620
解説〈付・参考文献〉・解題・年譜……639

写真撮影＝木村　浩／藤枝静男／本社写真部

装幀＝アド・ファイブ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

罪と罰

『罪と罰』主な登場人物

ロジオン・ロマーヌイチ・ラスコーリニコフ――愛称ロージャ。貧乏な二十三歳の、もと大学生。聡明だが、病的な神経と感受性をもつ。自分の窮境の打開と、ニヒリズム的な〝非凡人の理論〟の実証をめざして、質屋の老婆を殺し、シベリヤ流刑となる。

アヴドーチヤ・ロマーノヴナ・ラスコーリニコワ（ドゥーニャ）――主人公の妹。利口で誇り高く、犠牲的精神をもつ美貌の娘。

プリヘーリヤ・アレクサンドロヴナ・ラスコーリニコワ――兄妹のやさしい母。

ドミートリイ・プロコーフィイチ・ラズミーヒン――ロジオンの親友。友情あつい、不屈の精神をもつ青年。ドゥーニャと結婚する。

セミョーン・ザハールイチ・マルメラードフ――アル中のもと官吏。家族を貧窮におとしいれ、馬に踏みつぶされて死ぬ。

カテリーナ・イワーノヴナ――マルメラードフの後妻。気性のはげしい女。肺病やみで、貧乏と不幸な事件の続発に狂死する。

ソフィヤ・セミョーノヴナ・マルメラードワ（ソーニャ）――マルメラードフの娘。清純で、宗教心あつく、家族を救うため娼婦となる。ラスコーリニコフに自白をすすめ、流刑地シベリヤでその再生を助ける。

スヴィドリガイロフ――我欲をとげるために平然と罪を犯すが、また慈善心もある、複雑な性格の地主。

ルージン――ドゥーニャと婚約する、卑劣な俗物弁護士。

第一編

一

七月のはじめ、暑いさかりの、夕暮れも迫ろうとする頃、ひとりの青年が、S路地裏のアパートの住人からまた借りしている自分の部屋から表通りに出て、のろのろした、ためらいがちな足どりでK橋をさして歩きだした。

運よくおかみとは階段で顔をあわさずにすんだ。彼の部屋は高い五階だてのアパートのちょうど屋根裏にあって、住まいというよりむしろ戸棚のような感じだった。女中つき賄いつきで彼にこの小部屋を貸していた下宿のおかみは、ひと階段下の独立した住まいに陣どっていたので、彼は外出するたびに、たいてい階段にむかって開けはなしてあるおかみの家の台所のそばをどうしても通らなければならず、そのたびに青年はなにやら病的な、おどおどした気持ちになり、それが恥ずかしくて、顔をしかめるのだった。おかみには借りがずいぶんたまっていたので、顔をあわすのが怖かったのである。

が、かといって彼はそれほど小心で臆病だったわけではなく、むしろその正反対だったのだ。それが、いつ頃からか、ヒポコンデリーに似た、いらいらした緊張した気分になっていた。あまりにも自分のなかに閉じこもり、みんなから遠ざかって暮らしていたため、おかみどころか、だれと顔をあわすのも怖くなってしまっていたのである。彼はたしかに貧乏にうちひしがれてはいた。が、その窮迫状態もこのところそれほど苦にならなくなっていた。彼はしなければならぬその日その日の仕事もすっかりやめてしまっていたし、する気もなかった。ほんとうのところは、おかみが自分にたいしてなにをたくらもうと、怖くはなかったのだが、階段でつかまって、自分にはまったく用のない、ありふれたばか話の百万だらを聞かされたり、例のしつこい支払いの催促をされたり、威し文句や泣き言を聞かされたりして、そのたびに言いのがれをしたり謝ったり嘘をついたりするよりは、――なんとかして猫のように階段をすべりぬけて、だれにも見つからないようにこっそり逃げ出したほうがましだと思ったのである。

しかし、通りへ出たあとで今度は、自分はこうも貸主と顔をあわすのを怖がっているのかと、われながらあきれてしまった。

『あんな大事をたくらみながら、こんなつまらないことにびくびくしているなんて！』と彼は妙な薄笑いを浮か

べながら考えた。『ふむ……そうだ……人間、何もかも自分の掌中に握っていながら、すんでのところでとり逃がしてしまうのは、ひとえに臆病のせいなんだ……こいつはもう自明の理だ……ところで、人間はなにを一ばん恐れるかだ。あたらしい一歩、自分自身のあたらしい言葉、人間はこれを一ばん恐れているのだ……それはそうと、おれはちょっとしゃべりすぎるんじゃないかな。しゃべりすぎるから、なんにもしないことになるんだ。いや、ひょっとしたら、なんにもしていないからしゃべりすぎるのかも知れないぞ。こういうひとり言をいう癖がついたのはここ一ヵ月の間だ。毎日夜昼ぶっとおしに部屋のなかでごろごろして……夢みたいなことを考えているうちにこういう癖がついてしまったのだ。それはそうと、おれは今なんのために歩いているんだ？　いったいおれにあんなことができるんだろうか？　そもそもあれはまじめな話なんだろうか？　いや、まじめな話などころか、ただ夢を描いて自分で自分を慰めているだけのことさ。おもちゃだ！　そうさ、まあおもちゃってところだ！』

往来の暑さといったらなく、おまけに息ぐるしさ、雑踏、いたる所にある石灰、建築の足場、煉瓦、埃、それに別荘を借りるほどのゆとりのないペテルブルクの住民ならだれ知らぬものもない例の一種特別な夏の悪臭――そういったものがただでさえ調子の狂っている青年の神経をいっせいに不愉快にゆさぶるのだった。市内のこのあたりに特別多い呑み屋から発散するどうにも我慢のならない悪臭や、平日なのにひっきりなしに行きあう酔いどれなどが、こうした情景のいやらしい憂鬱な色調を一段と濃くしていた。ふかいふかい嫌悪の情が一瞬ちらりと青年のきゃしゃな顔をかすめた。ついでに言っておくが、彼はなかなかの美男子で、すてきな黒ずんだ目をし、髪は栗色で、背は中背よりやや高く、体つきは痩せがたで、すらりとしていた。が、彼はたちまち何やらふかい物思い、いや、もっと正確に言えば、一種の忘我の境とでもいうべき状態におちたらしく、もはや周囲には目もくれず、また目をくれようともせずに歩き出した。ただときたま、なにやらぶつぶつひとり言を言うのだが、これは今自分でも認めた例のひとり言の癖が出たのだ。とたんに、彼は自分でも考えが時おり混ぜこぜになるし、それにからだが衰弱しきっていることに気づいた。これでもう二日も物をほとんど何ひとつ口に入れていなかったのである。

彼の身なりといったらひどいもので、ほかの人なら、そういうものを着つけている者でも、これほどのぼろを着て昼日なか外へ出るのは気がひけるくらいだった。もっとも、かいわいがかいわいなだけに、ここでは服装

などでそうたやすく人の目を見張らせることはなかった。なにせここはセンナヤに近く、いかがわしい遊び場はやたらにあるし、それに、なんといっても、これらペテルブルクの中心部の通りや横丁は、町工場の職工や職人がびっしり住んでいる所だけに、時にはあたり一帯の眺望にいろんな人間が入り混じるわけで、それだけに変わった風体の人間に出会って驚くほうがおかしいくらいのものなのだ。それにしても、青年は、すでに心に毒々しい侮蔑の情が積もり積もっていたため、ときにはひどくうぶなデリケートなところを見せる男なのに、このときばかりは往来にいながら自分のぼろ服を恥じる気持ちなどさらさらなかった。もっとも、だれか知人とか、昔の学友とか、一体に会いたくないような者にでも出くわせば、問題は別だろうが……ところが、そうこうするうち、どこかの酔っぱらいが、図体の大きい駄馬がひく大型の荷馬車で、今時分どこへどうして行くのか往来を運ばれていきながら、通りがかりに「やい、このドイツ帽め！」といきなりどなって、彼を指さしながら大声でわめきだしたときには、――さすがの青年もぴたりと足をとめて、発作的に自分の帽子に手をかけた。帽子というのは丈の高い丸いツィンメルマン製なのだが、もうすっかり古びてしまって、完全ににんじん色を呈し、穴だらけ、しみだらけで、ふちはとれてしまい、ぶかっこうきわまる角が横へひんまがっているような代物だった。ところが、彼をとらえたのは羞恥の気持ちではなくて、そんなものとはまったくちがった、驚愕にも似た感情だったのである。「おれだってそんなことはわかっていたよ！」と彼はどぎまぎしながらつぶやいた。『おれもそう思っていたんだ！　こいつがまず何よりもいけないんだ！　こうした、ちょっとしたばかばかしいことが、ちょっとしたくだらない些細なことが、計画をすっかりぶちこわしてしまうものなんだ！　そうだ、この帽子は目だちすぎる……滑稽だから目だちすぎるんだ……このおれのぼろ服には、よしんば古びた、せんべいみたいなかっこうのでもいいから、どうしても学帽でなくちゃいけない、こんな化け物じゃだめだ。こんなのはだれもかぶっちゃいないから、一キロ先からだって人に気づかれて、覚えられちまう……第一、覚えられちまったが最後、立派な証拠になるじゃないか。今のうちはなるべく目だたないようにしていなきゃ……些細なことが、些細なことが肝心なんだ！　いつでもこういった些細なことからなにもかもだめになってしまうんだからな……』

道のりはいくらもなかった。自分のアパートの門から何歩かということまで知っていた。きっかり七百三十歩なのだ。いつか、空想をたくましゅうした折に、数えたことがあったのだ。あの頃はまだ彼は自分でも、あの空

想の実現を信じてはいなかった。そしてただその醜悪な、だが魅力にとんだ不敵な考えで自分を刺激していただけだった。ところが、ひと月たった今では、見方がちがってきて、例のひとり言で自分の気の弱さや優柔不断をさんざん嘲りながらも、その「醜悪な」空想をいつしかおのずとすでに立派なひとつのくわだてと見なすことに慣れてしまっていた、とはいっても、やっぱりまだ自分で自分が信じられなかったのだが。で今も彼はその自分のくわだての瀬踏みに行くところなのだ。そんなわけで、一歩毎に興奮が激しさを増してくるのだった。

彼は心臓がとまりそうになり神経的なふるえを覚えながら、構えの大きい建物に近づいていった。その建物は一方の壁はどぶ川に面し、もう一方の壁は××通りに面していた。そのアパートは、ぜんたいが小割りの貸部屋になっていて、あらゆる種類の職人——服屋、錠前屋、料理女、さまざまなドイツ人、自分の身を売って生きている女たち、小役人といったような手あいが住んでいた。アパートの二カ所の門と二つの中庭の出入りは激しかった。ここには門番も三、四人は勤めていた。青年は、その門番のだれにも出会わなかったので大いに悦に入って、見とがめられずに、たちまち門から右手の階段へすべりこんだ。階段というのは暗くて狭い、いわゆる「裏梯子」だったが、彼はそういったことは全部心得ており、研究しつくしていて、そういった状況がすっかり気に入っていたのである。というのは、そういう暗闇だったら、物好きな人の目でさえ危険ではないからだ。『今からこんなにびくついているようでは、もしひょっとしてこれから例のあの仕事に本式にとりかかりでもしたら、いったいどうなるんだろう？　……』と四階めにさしかかったときに、彼はふとそう思った。ここで彼はある貸部屋から家具を運び出していた兵隊あがりの人夫に道をふさがれてしまった。彼にはもう前々から、その貸室に家族もちのドイツ人の官吏が住んでいることがわかっていた。『してみると、あのドイツ人は引っ越しの最中なんだな。ということはつまり、この階段のほうの四階とこの踊り場で、当分のあいだ、ふさがっているのはあの婆さんの住まいだけということになる。こいつは都合がいいぞ……万一の場合に……』と彼はまた考えて、老婆の住まいの呼び鈴を鳴らした。呼び鈴は、まるで真鍮ではなくてブリキかなにかでこしらえたものみたいに、かすかなガラガラという音がした。こういうアパートの小割りの住まいには大抵こういう呼び鈴がついているものなのだ。彼はすでにこの呼び鈴の音を忘れてしまっていたので、今この独特な音にまるで不意に何かを思い出させられ、まざまざと思いうかべさせられたようなぐあいで、……ぶるっと身ぶるいした。このときは

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

神経がひどく弱っていたのだ。しばらくすると、ドアが細めにあいて、その隙間から女あるじが来客をうさんくさそうな目つきで眺めまわしているらしく、闇のなかからぎらぎら光っている小さな目だけが見えていた。が、老婆は踊り場に人が大勢いることがわかったので、勇気を出して、ドアをいっぱいにあけた。青年は敷居をまたいで、間仕切りで仕切ってある暗い玄関にはいった。間仕切りのむこうはちっぽけな台所になっていた。老婆は彼の前にむっつりと立ったまま、問いただすように彼を見つめていた。それは、意地わるそうな鋭い金壺まなこと、小さな、とがった鼻をした、小づくりの、しなびた、年の頃は六十くらいの老婆で、頭にはなにもかぶっていなかった。少々白髪まじりの亜麻色の髪にはべっとりと油を塗りつけていた。そして、鶏の足にそっくりの細長い首にはフランネルのぼろ切れかなにかをまきつけ、肩からは、この暑さなのに、すっかりすり切れて黄色くなっている毛皮の上着をぶら下げている。小柄な老婆はひっきりなしに咳をしたり、のどを鳴らしたりしていた。きっと、青年がなにか特別な目つきで彼女を見たせいだろう、彼女の目にたちまちまた最前のうさんくさそうな表情がひらめいた。

「ラスコーリニコフですよ、学生の、ひと月ほど前にうかがったことのある」青年はもっと愛想よくしなければと思いなおして、軽く会釈をしながら急いでつぶやくように言った。

「覚えていますよ、あんた、よく覚えていますよ、お出でになったことは」と、老婆は相変わらず例の物問いたげな目を相手の顔からそらさずに、はっきりした口調で言った。

「実はその……またおなじような用件で……」と、ラスコーリニコフは語をついたが、老婆の猜疑心にいささかうろたえ気味でもあり、驚いているふうでもあった。

『が、しかし、もしかしたらこの婆さんはいつでもこんなふうなのかも知れんぞ、この前は気がつかなかっただけで』と彼は、不愉快な気持ちになって考えた。

老婆は、思いめぐらしているようなふうに、ちょっと口をつぐんでいたが、やがてわきへ身をひいて、なかへはいるドアを指さしながら、

「おはいりなさい」

と言って、客を通した。

青年が通った小ぢんまりした部屋には黄色い壁紙がはりめぐらしてあり、窓にはゼニアオイがおいてあって、モスリンのカーテンがかかっていたが、ちょうどそのとき部屋のなかが入り日にぱっと明るく照り映えた。『そうすると、そのときもこんなふうに日がさすわけか……』まるで思いもかけなかったようにラスコーリニコフの頭

にそんな考えがひらめいた。彼はすばやい視線を部屋じゅうに走らせ、できるだけ部屋の状況を研究して覚えこんでおこうとした。が、しかし室内にはこれといって特別目をひくものはなにひとつなかった。家具はどれもこれもひどく古い、イヌエンジュ製のものばかりで、大きな彎曲した木づくりの背のついた長椅子と、その前においてある楕円形のテーブルと、窓あいにある鏡台と、壁ぞいにならべてある数脚の椅子と、それに小鳥を手にしたドイツ人の令嬢などが描いてある、黄色い額ぶちにはいった二、三枚の安物の絵と、――それで家具は全部だった。部屋の隅のあまり大きくない聖像には燈明があがっていた。なにもかもしごく清潔で、家具も、床も、つやが出るほどふきこまれ、あらゆるものがてかてか光っていた。『リザヴェータがやっているんだな』と青年は思った。部屋じゅう埃ひとつなかった。『因業な年寄りの後家の家というものはえてしてこんなふうに清潔なものさ』とラスコーリニコフは腹のなかで考えながら、小ぢんまりしたつぎの間に通ずるドアの前にかかっている更紗のカーテンを、好奇心にかられて横目づかいにちらりと見た。つぎの間には老婆の寝台とたんすがおいてあったのだが、彼はそこをまだ一度ものぞいたことはなかったのだ。住まいはこの二つの部屋だけだった。

「ご用件は？」と、老婆は部屋へはいって来ると、さっきのように彼の真ん前に突立って相手の顔をまともに見ながら、きっとした口調で言った。

「質草を持ってきたんです、ほら、これです！」青年はポケットから旧式の平べったい銀時計をとりだした。時計の裏ぶたには地球儀が描かれていた。鎖は鉄だった。

「でも、前のももう期限が来てますよ。おとといで、ちょうどひと月ですからね」

「じゃ、もうひと月分利子を入れますから、しびれを切らさないでいて下さい」

「しびれを切らそうと、たった今流そうと、そんなことはこっちの勝手ですよ、あんた」

「この時計なら、うんとはずんでもらえるでしょうな、アリョーナさん？」

「ろくでもないものばかり持ちこんでくるんだね、あんた、まあ、こんなもの、いくらにもなりませんよ。この前はあの指輪には二枚も出してあげたけど、あんなのは宝石屋であたらしいのでも一ルーブリ半で買えるんですからね」

「四ルーブリほど貸して下さいよ、受け出すから、おやじの形見なんでね。もうじき金がはいることになっているんですよ」

「一ルーブリ半ですね、それに利子は天引きで。それでよければ」

「一ルーブリ半！」と青年は叫んだ。
「じゃ、お好きなように」こう言って老婆は時計をつっ返した。青年はそれを受けとると、あまりの腹だたしさに、今にも帰りそうにしたが、とっさに思いなおした。この上どこといって行くあてもなし、それにまだほかのこともあって来たのだということを思いだしたのである。
「貸してもらおう！」と彼はぶっきらぼうに言った。
老婆はポケットへ手をつっこんで鍵をさぐって、カーテンのむこうのつぎの間にはいっていった。青年は、ひとり部屋の中央にとり残されると、好奇心にかられたように耳をそばだてながら、あれこれと考えをめぐらしていた。老婆のたんすをあける音がしていた。『上の引出しにちがいない』などと彼は想像していた。『鍵は、すると、右のポケットに入れているわけだな……全部束にして、鉄の輪にはめてあるんだ……あのなかに、歯のぎざぎざした、ほかのの三倍もある、一ばん大きな鍵がひとつあるが、もちろん、あれは、たんすの鍵じゃない……とすると、まだほかに何か手文庫か行李みたいなものでもあるんだろう……こいつはおもしろいぞ。行李にはたいていああいう鍵がついてるものだ……それにしても、おれはまったくあさましいことを考えてるもんだなあ……』
老婆がもどって来た。
「こういうことになります。一ルーブリにつき、利子が月十コペイカずつとすると、一ルーブリ半にたいして十五コペイカいただく勘定になって、それを天引きさせてもらいます。それからこの前の二ルーブリの分からもおなじ計算で先に二十コペイカ支払っていただきますと、しめて、つまり三十五コペイカになり、で、結局、今お宅さんの時計でお手もとにはいる金は一ルーブリ十五コペイカということになります。さあ、お受け取り下さい」
「えっ！　じゃ今度は一ルーブリ十五コペイカか！」
青年はさからいもせずに、金を受けとった。彼はじっと見つめているだけで、急いで立ち去ろうともしなかった。その様子は、まるでまだなにか言いたいことか、したいことがあるようでもありながら、それがいったいなんであるかは自分でもわからないらしかった……
「ひょっとしたらね、アリョーナさん、二、三日うちにもうひと品持ってくるかも知れませんよ……銀製の……立派な……シガレット・ケースをひとつ……友だちから返してもらったらすぐにね……」彼はへどもどして、口をつぐんでしまった。
「まあ、そのときはご相談に乗りましょう」

「じゃ、さようなら……ところで、おばあさんはいつもおひとりなんですか、妹さんはお留守のようですね？」と、彼は玄関に出ていきながら、できるだけくだけた調子で聞いた。

「あれになんの用事がおありかね？」

「いや、別になんにも。ただなんとなく聞いてみただけですよ。それなのにお婆さんはすぐにあれだからな……さようなら、アリョーナさん！」

ラスコーリニコフは気も転倒せんばかりになって外へ出た。惑乱はいやが上にもつのってきた。階段をおりる途中も、彼は、まるで不意になにかにおびえたように、何度か足をとめたくらいだった。そしてそのあげく、通りにおり立ったときとうとうこう叫んでしまった。

「いやはや！　まったく厭らしいったらありゃしない！　いったい、いったいおれは……いや、こんなことはばかげたことだ、こんなことは愚劣なことだ！」彼はきっぱりとこう言いそえた。「こんな恐ろしい考えが、よくもまあ、おれの頭に浮かんだものだ！　それにしても、おれはなんというけがらわしいことまで考えかねない男なんだろう！　第一、けがらわしいじゃないか、さもしいじゃないか、醜悪だ、実に醜悪だ！　……それなのに、このおれは、まるひと月も……」

しかし、彼は言葉でも絶叫でも自分の興奮を言いあらわせなかった。まだ老婆の家をめざして歩いていた頃から彼の心を圧迫しかきみだしはじめていた止めどのない嫌悪感が今や極限に達し、はっきりと正体をあらわしてきたため、彼は胸もふさがる思いにどこへ身をかくしたらいいかわからなかった。彼は、まるで酔っぱらいのように、道行く人にも気づかず、人にぶつかりながら歩道を歩いていくうちに、つぎの通りに来てやっとわれに返った。あたりを見まわしてみて、彼は居酒屋のそばに立っていることに気がついた。居酒屋の入り口は、歩道から階段づたいに下の地階へおりるようになっていた。ちょうどそのとき、戸口から酔っぱらいが二人出てきて、たがいに寄りかかって悪口を言いあいながら、往来へあがってきた。ラスコーリニコフはちょっと思案しただけで、すぐそこへおりていった。彼はこれまでに一度も呑み屋などへ足を踏み入れたことはなかったが、今は目まいがするし、おまけにのどが焼けつくほどからからに乾いていたのでつめたいビールでも一杯やりたかったのである。それだけではない、自分がこうもがっくり来たのは、空腹のせいだと思ったからである。彼は暗くて汚ならしい片隅の、妙にべとつく小さなテーブルにむかって腰をおろすと、ビールを注文して、最初の一杯をむさぼるように空けてしまった。と、たちまち憂さが晴

れ、考えもはっきりしてきた。『あんなことはみんなばかげたことだ』と、彼は希望をいだいて独りごちた。『なにもうろたえることはありゃしないさ！ 単なる体の不調にすぎないんだ！ ビールの一杯かそこらと、乾パンのひと切れぐらいで――ほれ、このとおり、一ぺんに頭はしっかりしちまうし、考えははっきりするし、意志も強固になってしまったじゃないか！ ちぇっ、なにもかもまったくけちくさいことじゃないか……』しかし、彼はこんなふうに軽蔑し唾棄したいような気持ちになりながらも、急になにか恐ろしい重荷でもおろしたように、はやくもはればれとした顔つきになり、居あわせた連中を人なつかしげに見まわした。とはいえ、その瞬間でさえ、彼は、こうした、なんでもよいほうにとろうとする気持ちもやはり病的なのだということをぼんやり意識していた。

居酒屋にはこのとき人はあまりいなかった。階段で出会った二人づれの酔っぱらいにつづいてさらに、娘がひとり混じり、アコーディオンなどを持った五人ほどのひと組が出ていったあとは、ひっそりとし、ひろびろとした感じになった。そしてあとに残っていたのは、ビールを呑んでいる、ほろ酔いらしい、一見商人ふうの男と、みじかい百姓外套を着、白いあごひげを生やした、でっぷり太った大男の連れだけで、その連れの男はだいぶ酔っぱらっていて、腰かけにかけたまま、居眠りをはじめ、ときおり急に、夢うつつのうちに、両手をひらいて指をぱちりぱちり鳴らしはじめたり、腰かけから腰もあげずに上半身をひょいとおどらすような恰好をしては、

まるまる一年、かかあをかわいがり
まある一年、かーかあをかわいがり……

といったような歌詞を一生懸命思いだそうとしながら、何やらばかげた歌をうたっていたかと思うと、急にまた、目をさまして、

ポドヤーチェスカヤを歩いていたら
昔のかかあを見いつけた……

などと、うたいだすのだった。

が、しかしだれひとりその男と楽しい気分を分けあおうとする者はいなかった。むっつりしている連れの男はそうした発作的な仕草をむしろ敵意をこめた猜疑の目づかいで眺めていた。その場にもうひとり、一見退職官吏ふうの男もいた。その男は酒びんを前にひとりぽつねんと坐って、ときたま一口やってはあたりを眺めまわしていた。彼もやはり、いくぶん興奮している様子だった。

二

ラスコーリニコフは人なかに出つけなかったし、前にも述べたように、とりわけこのごろはつきあいというものを一切避けていた。それが今急に、なにやら人恋しい気持ちになってきたのである。心のなかになにやら新しいことがおこると同時に、なにやら渇えたように人が恋しくなってきたのだ。彼はまるひと月も憂悶にふけり、陰鬱な興奮にかられ通しだったため疲れきってしまい、たとえ一分間でもよい、また場所もどこでもよいから、ちがった世界で息ぬきがしたかった。だから、こうして、汚ならしい場所がらにもかかわらず、満ちたりた気持ちでこの居酒屋に腰をすえたわけなのである。

店の亭主は別室にいるのだが、どこからか階段づたいにホールへおりて来る。そしてそのつどまず最初に、大きな赤い折り返しのついている、靴墨をてかてかに塗りたてた、しゃれた長靴をのぞかすのだった。彼はネクタイもつけず、ひだのついた半外套の下にひどく脂じみた黒じゅすのチョッキを着こんでいて、顔は一面に脂でてらてらし、まるで鉄の錠前のように光っていた。カウンターのむこうには十四歳くらいの少年と、そのほかにもっと年のいっていない少年がいて、これは、なにか注文があるたびに、品物を運んでいた。ここには小さなきゅうりや、黒い乾パンや、こま切れの魚がおいてあって、そういったものがまことにいやらしい悪臭を放っていた。息苦しくて、じっと坐っていられないし、あらゆるものに酒の匂いがしみこんでいるため、その空気だけでも五分もすれば酔っぱらってしまいそうだった。

世のなかには、まったく一面識もないのに、口をきく前から、なんだか急に、思わずひと目見ただけで興味を覚える相手とめぐりあうことがあるものだ。やや離れたところに坐っていた、退職官吏らしい例の客は、まさにそういった印象をラスコーリニコフに与えた。青年はその後いく度となくその第一印象を思い出し、これこそ虫の知らせというやつだと思ったものである。彼はその官吏に絶えずちらちら目をやっていた、というのは、いうまでもなく、むこうでもこちらをしつこく眺めて、いかにも大いに話しかけたがっているように見えたからである。官吏は、店のあるじをもふくめて居酒屋に居あわせたほかの連中にたいしては、なんとなく当たり前のような、それどころか飽き飽きしたような調子で、同時にいくぶん見くだしたようなところも見せながら、まるで身分も教養も最低な、話相手にもならない連中でも見るような目つきで見ていた。それはもう五十を越していそうな、中背で骨ぐみのがっしりした男で、ごま塩頭に大きなはげがあり、顔は絶えず酒びたりになっているために

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb